

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530486

研究課題名(和文) テレビドラマとポストモダン社会

研究課題名(英文) TV drama and Postmodern Society

研究代表者

長谷 正人 (HASE MASATO)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40208476

研究成果の概要(和文)：山田太一のさまざまな作品を映像作品として見直し、さらに山田太一氏本人や関係者へのインタビューも行って、70年代から80年代にかけての日本のテレビドラマがどのようにしてポストモダン的なイメージ社会を準備し、そしていかにそれを「後衛」の視点から批判したかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I scrutinized many Yamada Taichi's(Japanese famous script writer) TV drama works(mainly made among 70's and 80's) and made clear that his works anticipated Japanese postmodern society and criticized it from the backward's point of view.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：コミュニケーション、情報、メディア

1. 研究開始当初の背景

私は本研究開始以前、2002年 - 03年に「ドキュメンタリー・バラエティのメディア史的考察」、2004年 - 05年に「テレビ文化のメディア史的考察」でいずれも基盤研究(C)の交付を受けてテレビ研究を行ってきた。それらは、テレビのジャーナリズム的側面ではなく、テレビの娯乐的側面を学問的に新たに探求しようとする類例のない試みだった。

とくに後者の共同研究に関しては、報告書を制作するのみならず、『テレビだョ！全員集合』（青弓社）という一般書として公刊して、社会的に高い評価を得ることができた。

本研究は、それらの研究成果のなかで浮かび上がってきたテレビドラマと日本社会の問題を、本研究代表者がさらに単独で研究するために立ちあげたものである。

2. 研究の目的

本研究は、テレビドラマと1970年代以降の日本社会との関係を明らかにすることを目的として行われた。

これまで日本のテレビドラマに関しては、トレンドドラマとバブル社会の関係などのように、風俗論的な視点から社会との関係が言及されたり、あるいは、ある特定のドラ

マ作品が優れているかどうか時評的に問われたりすることはあった。しかし小津安二郎や黒澤明に関する映画研究に見られるような、一人の作家の作品を通時的に分析するような作家論的な視点を導入したテレビ研究はほとんど行われてこなかった。

これに対して本研究は、山田太一という一人のドラマ作家の作品を徹底的に見直すという作家論的な試みを行った。なぜ山田太一の作品が選ばれたかといえば、彼の作品が社会批評的に優れた側面を持っているからである。

核家族における主婦の孤独を扱った「岸辺のアルバム」、老人ホームの老人たちの誇りを失った心理を問いかけた「男たちの旅路・路面電車」、車椅子の障害者の自立運動を先駆的に扱った「同・車輪の一步」、四流大学生の社会的差別を描いた「ふぞろいの林檎たち」などが広く知られている。

本研究は、これらの作品が1970年代から80年にかけての日本社会の大衆文化や消費文化や若者文化のいかなる状況のなかで作られ、そうした社会状況に対して作家としての山田がどのように批判を加えようとしたかを、「敗者の想像力」というキーワードのよって俯瞰的な視点から分析をしようと試みたものである。

3. 研究の方法

(1)1970年代から現代にまでいたる様々な山田太一作品を映像作品として見直したり、脚本作品として読んだりして、それらをその制作当時のテレビメディアの状況や歴史状況と照らし合わせながら、単なる芸術作品としてではなく、社会状況とのかかわりにおいてその作品が持った意味を考察した。

(2)市販された過去のビデオ、DVD、書籍化された脚本、雑誌『ドラマ』掲載の脚本などをさまざまなルートで入手し、さらに足りない部分は、放送ライブラリーの視聴やCS放送などによる再放送を録画して作品の収集につとめた。

(3)主として作品のテキスト分析を中心に行ったが、傍証として山田太一氏自身や演出家の河村雄太郎氏、深町幸男氏に対するインタビューも行って、当時の制作事情に関する調査を行った。

(4)放映当時の社会状況やテレビメディア史の状況については、さまざまな作家や評論家が出版している、60年代から80年代にかけてのサブカルチャーをめぐる回顧録を読み込んで参考にした。できるだけドラマ史のなかだけではなく、歌謡曲、映画、ドキュメンタリーなど他の文化との関わりのなかに山田作品を位置づけ、テレビドラマの時代性が浮かびあがるように心がけた。

4. 研究成果

本研究の最大の成果は、「後衛」という観点を山田太一作品のなかに見出したことにある。

これまで書かれた、最も先鋭的なテレビ論は、萩元晴彦・村木良彦・今野勉『お前はただの現在にすぎない』（朝日文庫）だと言っていてよいだろう。彼らは1960年代に、映画のシネマ・ヴェリテの影響を受けて、街頭インタビューでいきなり「あなたは日の丸をどう思いますか」という質問を通行人に投げかけ、その困った姿をカメラで捉えることを通して、テレビとは何かを視聴者に考え直させるような「前衛的」な手法を展開していた（『あなたは…』、『日の丸』などの60年代のドキュメンタリー作品）。

この前衛的なテレビ手法が、70年代以降の日本のテレビの歴史を、より大衆化された番組の形で、突き動かしていたと言えるだろう。萩本欽一が、『欽ちゃんのドンとやってみよう!』（75年〜）で、街角でいきなりコントの葉書を読んで、意味が分からない老人の困惑する姿で笑いを取るのとは明らかにシネマ・ヴェリテ的だったし、その後もビートたけしの『天才・たけしの元気が出るテレビ!』（85年〜）でさびれた商店街の活性化計画と称して、タレントをイベントの日に送り込んで一時的に街を盛り上げ、引き上げると元のままになっていると嘆いてみせて、テレビというメディアが持つ吸引力を遊んでみたり、『進め!電波少年』（92年〜）においては、いわゆるアポなし取材と称して政治家やタレントに突撃して行って、その困惑したり取材を断られたりする過程で笑いを取ったり、

というように、70年代以降の日本では、前衛手法的な番組が大衆的な人気を取ってきた。前衛の大衆的テレビにおける実験が繰り返されてきた。おそらくそれは、絶えざる消費資本主義の運動に促された生活様式の革新と連動していたと思われる。

こうした大衆的な生活のレベルでの前衛化こそが、日本のポストモダン社会の特徴だっただろう。これに対して山田太一は、こうしたポストモダン的なテレビに背を向けて、前衛的な手法を全く取らなかった。彼のドラマは極めて平明で古典的な表現からできていた。そして、誰にも認めてもらえないで屈辱を感じている老人、外出を遠慮してしまう障害者、さえない人生を送るOL、四流大学生といった、社会のなかの弱い人々を主人公に取り上げた。しかも彼は、そうした弱い人々が、ドラマを通して最後には誇りを持って生きることができるよう、ドラマチックな展開を用意するわけではない。主人公たちは最後まで弱いままであり、むしろ山田は弱い人間が弱いままで生きることが肯定されなければならないと考えていたようなのだ。

このような山田太一の思想を、私は「敗者の想像力」と名付けた。『岸辺のアルバム』(77年)では、主人公の典型的な中産階級一家は、妻が孤独のあまりに浮気をし、長女はアメリカ人にレイプされて妊娠中絶を経験し、猛烈サラリーマンの夫は病気となって倒れ、会社も倒産してしまう。そこへ多摩川の氾濫が起こって、苦勞して手に入れた一軒家がまるごと流されてしまうのである。すべてを失った一家は下流を散歩していて、自分たちの家の流された屋根を発見する。そしてその屋根の上にみんなで座って、「さっぱりしてよかったじゃないか」と励ましあう。敗者としてすべてを失ったときに、彼らには光明のように希望の光が射してくるのである。

むろんそこには同時代の前衛芸術が巧みに持ち込まれている。最初に見知らぬ男から妻に電話がかかってくるときに、「この電話を切ったからといって、あなたに何があるというんです」と問いかけているからだ。この問いかけは、まさに萩元晴彦が『あなたは・・・』というテレビ番組で使っていた手法と良く似ているだろう。ただ、そのとき前衛的な芸術は、受容者に問いかけるだけで、あとは放りだしてしまっていた。それに対して、山田太一は、こうした日常生活の自明性の批判をまともに受け止めた人間は、その後どのように苦しんでいくかを想像して、丁寧にドラマとしてその過程を描くのである。つまり、前衛的な問いかけがされた「後」を描いているという意味で、これを「後衛」の思想と呼ぶことができるだろう。

この「後衛」という視点と「敗者」という視点から山田作品を見直したとき、彼のさまざまな作品をもう一度位置づけ直すことが可能になる。例えば、『異人たちとの夏』のような小説に関しても、「敗者」として解釈すれば、テレビドラマ作品と同じ枠組みのなかで考えることができるだろう。

これまでサブカルチャー論、大衆文化論は、暗黙のうちに「前衛」的であることを是としてきた。だから「後衛」の思想を見逃してきた。本研究は、その後衛の思想の可能性を山田太一がいかに探求してきたかを明らかにしたことが最大の成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 長谷正人、敗者の想像力―第 19 回 テレビの声を捜して、GALAC、放送批評懇談会、査読無、169 号、2011 年、36―39 頁。

- ② 長谷正人、敗者の想像力―第 18 回 『異人たちとの夏』、あるいは優しい幽霊たち、GALAC、放送批評懇談会、査読無、168 号、2011 年、36―39 頁。
- ③ 長谷正人、敗者の想像力―第 17 回 『日本の面影』、敗者の思想としての怪異譚、GALAC、放送批評懇談会、査読無、167 号、2011 年、38―41 頁。
- ④ 長谷正人、敗者の想像力―第 16 回 キツネに化かされる話、GALAC、放送批評懇談会、査読無、166 号、2011 年、36―39 頁。
- ⑤ 長谷正人、敗者の想像力―第 15 回 『あめりか物語』、あるいはドラマにおける一般性と固有性、GALAC、放送批評懇談会、査読無、165 号、2011 年、38―41 頁。
- ⑥ 長谷正人、敗者の想像力―第 14 回 『シャツの店』、鶴田浩二というキャラクター、GALAC、放送批評懇談会、査読無、163 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑦ 長谷正人、敗者の想像力―第 13 回 『想い出づくり』、キャラが立つこととリアリズム、GALAC、放送批評懇談会、査読無、162 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑧ 長谷正人、敗者の想像力―第 12 回 テレビドラマとポストモダン、GALAC、放送批評懇談会、査読無、161 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑨ 長谷正人、敗者の想像力―第 11 回 輝きたいの、GALAC、放送批評懇談会、査読無、160 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑩ 長谷正人、敗者の想像力―10 回 内気な青年、あるいは後衛的ヌーヴェル・ヴァーグ、GALAC、放送批評懇談会、査読無、158 号、2010 年、40―43 頁。
- ⑪ 長谷正人、敗者の想像力―第 9 回 不機嫌なドラマ、GALAC、放送批評懇談会、査読無、157 号、2010 年、38―41 頁。
- ⑫ 長谷正人、敗者の想像力―第 8 回 敗者の逆転劇、GALAC、放送批評懇談会、査読無、156 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑬ 長谷正人、敗者の想像力―第 7 回 不条理劇が終わった後を描くドラマ、GALAC、放送批評懇談会、査読無、155 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑭ 長谷正人、敗者の想像力―第 6 回 敗者の不条理劇、GALAC、放送批評懇談会、査読無、154 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑮ 長谷正人、敗者の想像力―第 5 回 敗戦国日本の旅路、GALAC、放送批評懇談会、査読無、153 号、2010 年、36―39 頁。
- ⑯ 長谷正人、敗者の想像力―第 4 回 岸辺の原っぱ、GALAC、放送批評懇談会、査読無、151 号、2009 年、36―39 頁。
- ⑰ 長谷正人、敗者の想像力―第 3 回 「敗

者」としての林檎たち、GALAC、放送批評懇談会、査読無、150号、2009年、36-39頁。

⑱ 長谷正人、敗者の想像力—第2回 「敗者」としてのテレビ脚本家、GALAC、放送批評懇談会、査読無、149号、2009年、38-41頁。

⑲ 長谷正人、敗者の想像力—第1回 遅刻者が書く山田太一論、GALAC、放送批評懇談会、査読無、148号、2009年、32-35頁。

⑳ 長谷正人、敗者の想像力—第19回 テレビの声を捜して、GALAC、放送批評懇談会、査読無、169号、2011年、36-39頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷 正人 (HASE MASATO)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：40208476